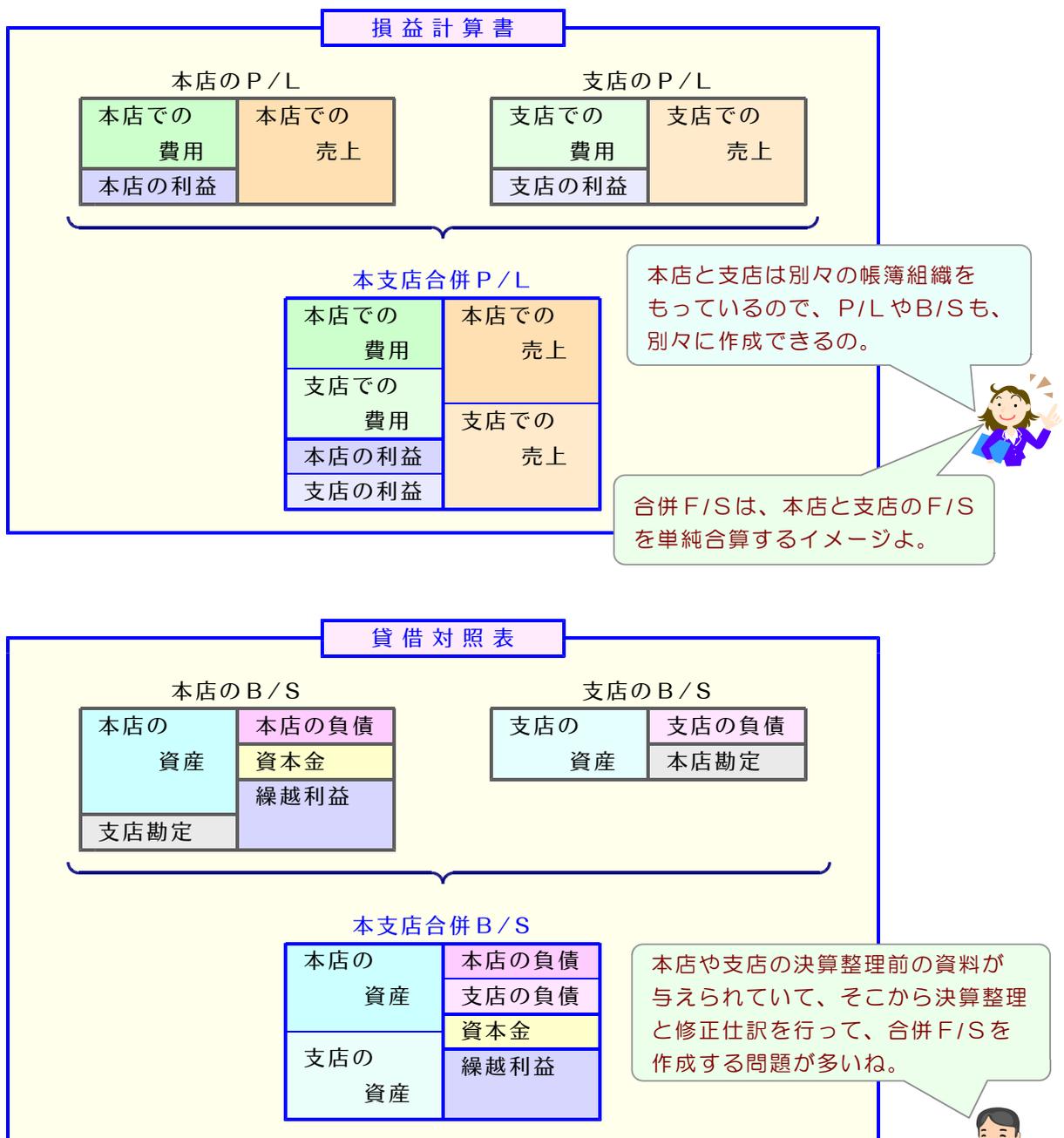


事業規模が拡大すると、会社は、支店形態か子会社形態で事業を展開していきます。この2つの事業展開形態に、会計では、「本支店会計」と「連結会計」で対応します。

本章では「本支店会計」を、第Ⅱ部で「連結会計」を学習します。

1. 総論

本支店会計の構造を理解するための、簡単なイメージ図です。



2. 本店勘定と支店勘定

本店と支店のB/Sには、それぞれ「支店勘定」と「本店勘定」が登場します。この2つの勘定の金額は、決算整理後の段階で、貸借は逆ですが、金額は必ず一致します。

この2つの金額は、合併B/Sを作成する際に、精算表の「修正記入」欄で必ず相殺消去します。

本店と支店は、対内的には独立した会計単位であっても、対外的には一つの会計単位とされるためです。

ここでは、「支店勘定」と「本店勘定」がもつ3つの意味について検討します。

2-1 「支店勘定・本店勘定」の意味 ① ～ 出資と元入れ

第Ⅱ部で学習する連結会計と比較しておきましょう。

たとえば、親会社Pが子会社Sを設立するにあたって、子会社Sに10万円の資本拠出を行った場合、親会社Pは次のような仕訳を行います。

(親会社)	(借) S社株式	100,000	(貸) 現金	100,000
-------	----------	---------	--------	---------

この支出は、「10万円は返さなくていいけど、出資に見合うだけ配当を出してね。」という趣旨で行われており、当該出資の証（あかし）として、借方に「S社株式」を計上しています。

支店を設立する際にも、本店が支店に対し資金を拠出します。たとえば、支店設立のために、10万円の拠出を行った場合には次のような仕訳を行います。

(本店)	(借) 支店	100,000	(貸) 現金	100,000
------	--------	---------	--------	---------

従って、支店勘定（借方残）の第1の意味は、「支店に対する出資」といえます。

では、支店側からも検討してみましょう。

たとえば、子会社Sが10万円の資本拠出を受けた場合、子会社は次のような仕訳を行います。

(子会社)	(借) 現金	100,000	(貸) 資本金	100,000
-------	--------	---------	---------	---------

支店を設立する際にも、本店が支店に対し資金を拠出します。たとえば、支店設立のために、10万円の拠出を行った場合、支店は次のような仕訳を行います。

(支店)	(借) 現金	100,000	(貸) 本店	100,000
------	--------	---------	--------	---------

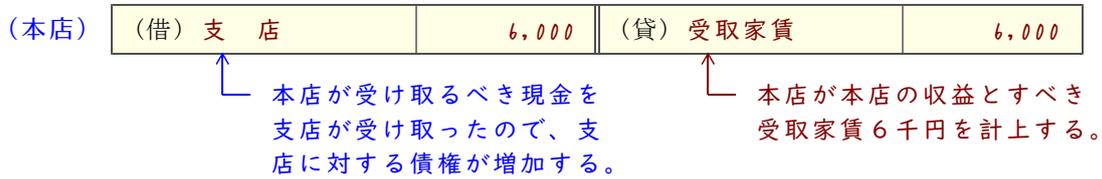
従って、本店勘定（貸方残）の第1の意味は、「本店からの元入れ」といえます。



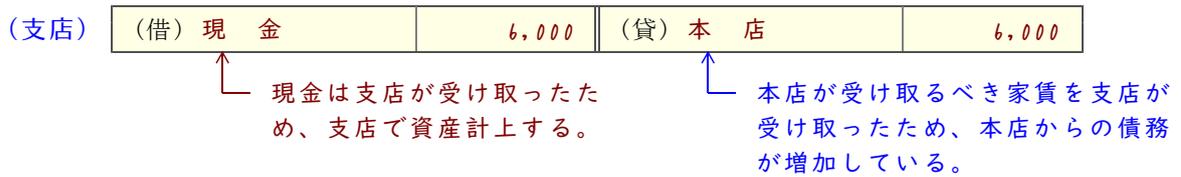
まず、
本店の支店勘定は、「支店に対する出資」、
支店の本店勘定は、「本店からの元入れ」
って意味があるのね。

2-2 「支店勘定・本店勘定」の意味 ② ～ 債権と債務

次に、本支店間で費用や収益の付け替えを行う場合に、支店勘定や本店勘定を用います。たとえば、本店が第3者にアパートの貸し付けを行っていて、その家賃6,000円を支店が受け取った場合、本店及び支店では、それぞれ次のような仕訳を行います。



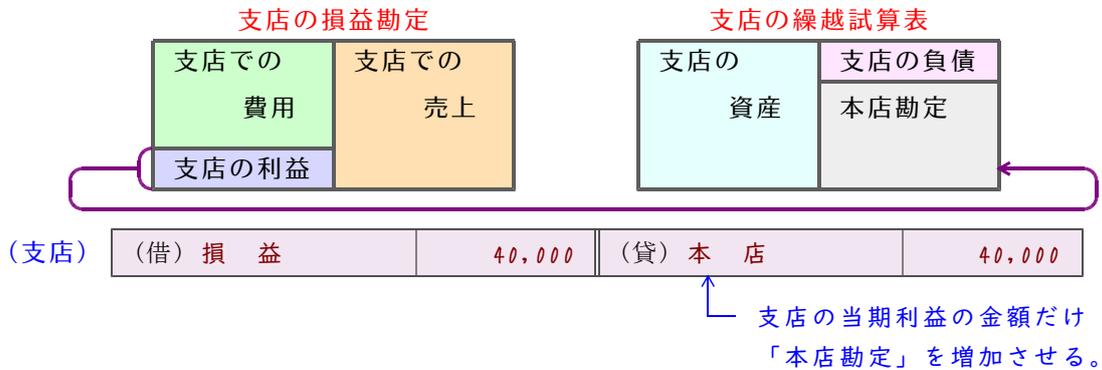
従って、支店勘定（借方残）の第2の意味は、「支店への債権」といえます。



従って、本店勘定（貸方残）の第2の意味は、「本店からの債務」といえます。

2-3 「支店勘定・本店勘定」の意味 ③ ～ 支店の繰越利益

ここは、支店から先に検討した方がわかりやすいです。たとえば、当期の支店利益が4万円あった場合、支店の資産も純額で4万円増加することになりますが、支店は資本金勘定や繰越利益勘定をもたないため、同じB/S貸方項目の本店勘定（貸方残）を増加させます。



本店では、支店の利益を総合損益勘定に計上するとともに、同額だけ支店勘定を増加させます。

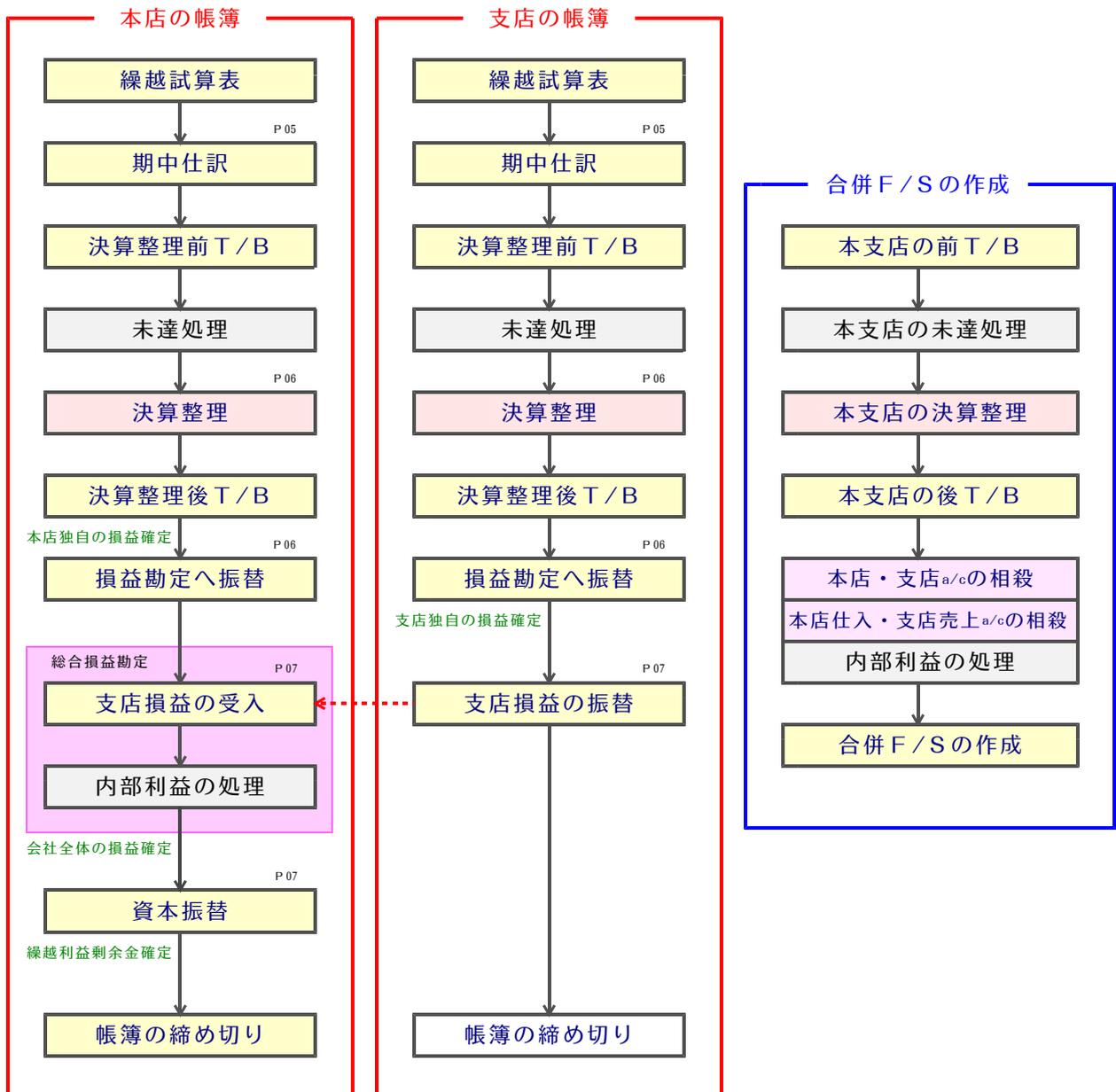


従って、本店勘定や支店勘定には、支店の繰越利益が含まれていることになります。

3. 本支店会計一巡

本支店会計では、本店と支店の帳簿をもとに、会計責任者が本支店合併財務諸表（合併F/S）を作成します。財務諸表自体は帳簿でないため、合併F/Sの作成も帳簿外で行われることとなります。この関係を図示すると以下のようになります。

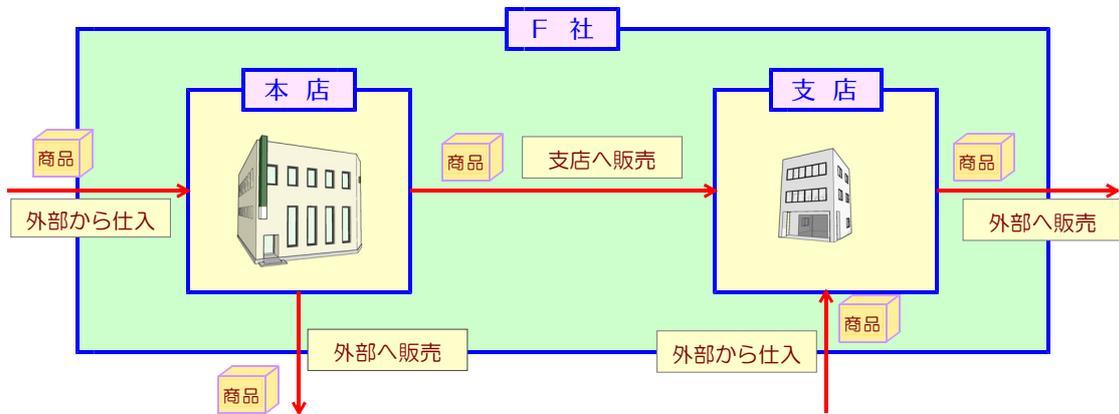
なお、下図中の「未達処理」と「内部利益の処理」については、上級で学習します。



本支店会計については、第1問で「仕訳問題」、第2問で「勘定記入」、第3問で合併F/Sの作成問題が問われる可能性があります。受験上、大変重要な学習分野になるので、丁寧に学習することを心がけて下さい。

3-1 期中仕訳

下図のように、本支店間で、商品売買を行っているケースがよく出題されます。



本支店会計では、本店と支店の会計がそれぞれ独立しているため、外部との取引は今まで学習したものと同じになります。従って、ここでは、本支店会計特有の本支店間取引に関連する仕訳について学習します。

① 本店は、10,000円で仕入れた商品Aを10,000円で支店に販売した。

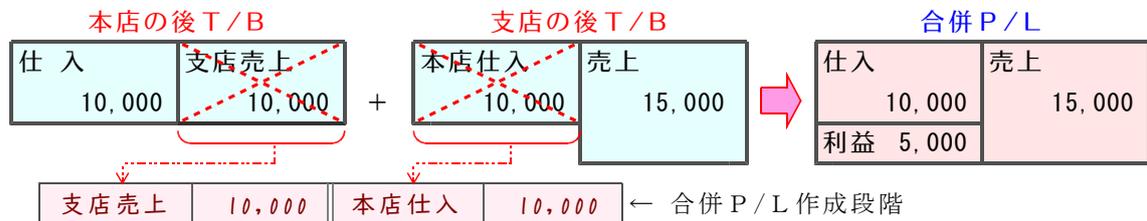
(本店の仕訳)

--	--	--	--

(支店の仕訳)

--	--	--	--

※ 支店売上と本店仕入は、合併損益計算書を作る段階で、相殺消去します。



※ この相殺消去を行わないと、現実の企業活動を現実より大きく見せることになってしまいます。



② 本店は、支店の営業費 8,000円を立替払いした。

(本店の仕訳)

--	--	--	--

(支店の仕訳)

--	--	--	--

③ 本店は、支店の売掛金 5,000円を回収した。

(本店の仕訳)

--	--	--	--

(支店の仕訳)

--	--	--	--

3-2 決算整理仕訳

本支店会計を採用することで、新たに必要となる固有の決算整理仕訳はありません。ここでは、棚卸資産に関する決算整理仕訳について確認します。

設例1 決算整理仕訳

本店：	期首帳簿棚卸高	7,000円	期末帳簿棚卸高	5,000円
支店：	期首帳簿棚卸高	6,000円	期末帳簿棚卸高	3,600円

(本店の仕訳)

仕入	7,000	繰越商品	7,000
繰越商品	5,000	仕入	5,000

(支店の仕訳)

仕入	6,000	繰越商品	6,000
繰越商品	3,600	仕入	3,600

3-3 決算振替仕訳

(1) 支店において、「損益勘定」を作成し、支店独自の損益を「本店勘定」に振替える。

支店では、まず、費用・収益に属する勘定について、損益勘定に振り替えます（決算振替仕訳）。損益勘定の貸借差額が「支店独自の損益」です。次に、支店には「資本金勘定」や「繰越利益勘定」がないため、支店独自の損益をB/S項目である「本店勘定」に振替えます。

支店の「損益勘定」

3/31 仕入	××	3/31 売上	××
〃 本店仕入	××	〃 受取家賃	××
〃 営業費	××		
〃 本店	A		

支店の「本店勘定」

・	××	4/ 1 前期繰越	××
		・	××
		・	××
次期繰越 C		3/31 損益	A

支店独自の損益を「本店勘定」に振り替える。

損益 A / 本店 A

(2) 本店において、「損益勘定」を作成し、本店独自の損益を「総合損益勘定」に振替える。

本店でも損益勘定を作成し、その貸借差額として、「本店独自の損益」を把握します。支店では「本店勘定」に振り替えましたが、本店では、会社全体の損益を把握するため、「本店独自の損益」は、「支店勘定」ではなく「総合損益勘定」に振替えます。

本店の「損益勘定」

3/31 仕入	××	3/31 売上	××
〃 営業費	××	〃 支店売上	××
〃 減価償却費	××		
〃 総合損益	B		

本店の「総合損益勘定」

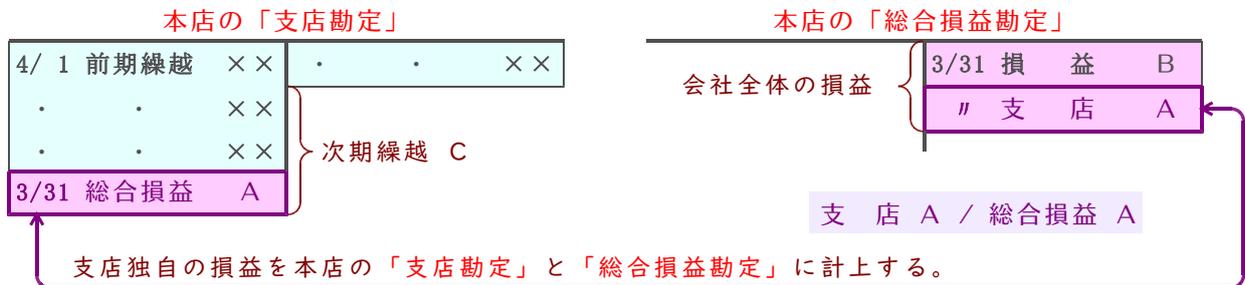
3/31 損益	B
---------	---

本店独自の損益を「総合損益勘定」に振り替える。

損益 B / 総合損益 B

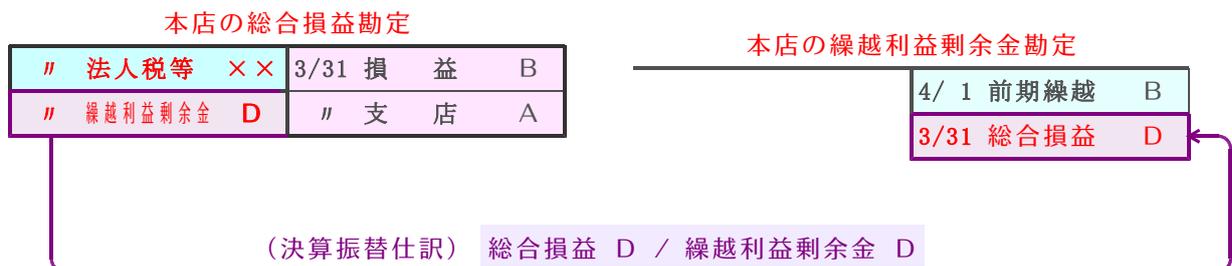
(3) 本店において、支店独自の損益を「支店勘定」と「総合損益勘定」に受け入れる。

本店では、「総合損益勘定」で会社全体の損益を把握するため、「支店独自の損益」を支店から教えてもらい、「総合損益勘定」に計上します。



本店の「支店勘定」を「支店独自の損益」の金額だけ増加させるのは、支店の「本店勘定」に「支店独自の損益」が振替えられているため、本店の「支店勘定」にも「支店独自の損益」を振替えないと、「本店勘定」と「支店勘定」をバランスさせることができないためです。

3-4 「総合損益」の残高から法人税等を控除した残額を繰越利益剰余金勘定に振替える。



※ 最後に、B/S項目の各勘定を「次期繰越」という形で締め切ります。

設例2 合併F/Sの作成

本支店会計を採用している甲社（3月決算）について、以下の各問に答えなさい。

- (1) 本店及び支店で行われる決算整理仕訳を示しなさい。
- (2) 本店及び支店における税引前の利益の額を求めなさい。
- (3) 支店勘定の次期繰越額を求めなさい。
- (4) ×8年3月31日の本支店合併損益計算書を作成しなさい。

1. 決算整理前残高試算表

残高試算表

借方	本店	支店	貸方	本店	支店
現金	236,800	128,000	買掛金	217,000	28,000
当座預金	408,000	83,200	借入金	786,000	
受取手形	123,000		貸倒引当金	2,600	1,400
売掛金	213,000	98,000	建物減価償却累計額	38,000	32,000
繰越商品	164,000	78,000	車両減価償却累計額	48,000	52,000
支店	781,200		本店	—	781,200
土地	420,600	164,000	資本金	1,000,000	
建物	260,000	284,000	利益準備金	240,000	
車両	220,000	122,000	繰越利益剰余金	280,000	
仕入	1,064,000	265,000	売上	1,460,000	666,000
本店より仕入		230,000	支店へ売上	230,000	
営業費	419,000	108,400	受取家賃	40,000	
支払利息	32,000				
	4,341,600	1,560,600		4,341,600	1,560,600

2. 期末整理事項

- 1) 商品の期末棚卸高は次の通りである。
 本店：帳簿棚卸高 160,000円
 支店：帳簿棚卸高 114,000円
 ※ 支店期末棚卸高のうち、60,000円は本店から仕入れたものである。
- 2) 受取手形と売掛金の期末有高に対して本支店とも3%の貸倒引当金を設定する。
- 3) 固定資産の減価償却を以下の通りに行う。
 建物：本店、支店ともに定額法（耐用年数20年、残存価額ゼロ）
 車両：本店、支店ともに定率法（償却率25%）
- 4) 営業費の未払分は次の通りである。
 本店：8,000円
 支店：6,000円
- 5) 本店の前払利息は、8,000円であった。
- 6) 本店の未収家賃は、12,000円であった。
- 7) 法人税、住民税及び事業税を100,000円未払計上する。

(1) 本店及び支店で行われる決算整理仕訳

① 本店分

1)	仕入	164,000	繰越商品	164,000
	繰越商品	160,000	仕入	160,000
2)	貸倒引当金繰入額	7,480	貸倒引当金	7,480
3)	減価償却費	56,000	減価償却累計額	56,000
4)	営業費	8,000	未払営業費	8,000
5)	前払利息	8,000	支払利息	8,000
6)	未収家賃	12,000	受取家賃	12,000
7)	法人税等	100,000	未払金	100,000

② 支店分

1)	仕入	78,000	繰越商品	78,000
	繰越商品	114,000	仕入	114,000
2)	貸倒引当金繰入額	1,540	貸倒引当金	1,540
3)	減価償却費	31,700	減価償却累計額	31,700
4)	営業費	6,000	未払営業費	6,000

(2) 本店及び支店における税引前の利益の額を求めなさい。

本店 P/L				支店 P/L			
期首商品	164,000	期末商品	160,000	期首商品	78,000	期末商品	114,000
仕入	1,064,000	売上	1,460,000	仕入	265,000	売上	666,000
営業費	427,000	支店売上	230,000	本店仕入	230,000		
支払利息	24,000	受取家賃	52,000	営業費	114,400		
貸引繰入	7,480			貸引繰入	1,540		
減価償却費	56,000			減価償却費	31,700		
当期利益	(2) 159,520			当期利益	(2) 59,360		
	1,902,000		1,902,000		780,000		780,000

(3) 支店勘定の次期繰越額

$$\text{支店勘定次期繰越額} = \text{前T/B } 781,200 + \text{支店損益 } 59,360 = 840,560\text{円}$$

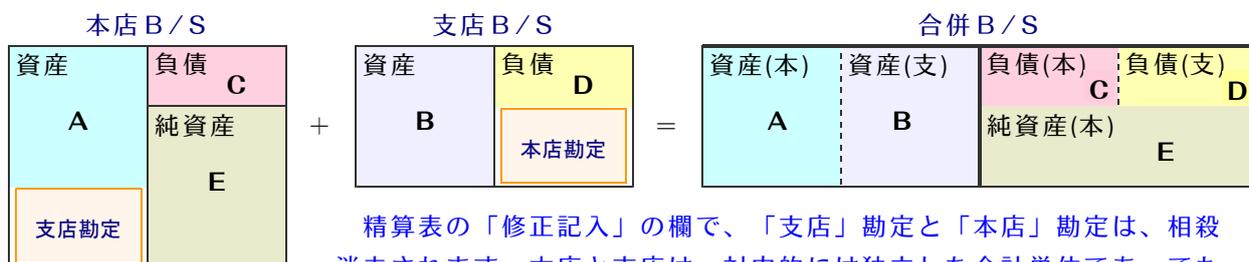
(4) ×8年3月31日の本支店合併損益計算書を作成しなさい。

損益計算書	
売上高	(2,126,000)
売上原価	
期首商品棚卸高	(242,000)
当期仕入高	(1,329,000)
合計	(1,571,000)
期末商品棚卸高	(274,000)
売上総利益	(829,000)
販売費及び一般管理費	
営業費	(541,400)
貸倒引当金繰入	(9,020)
減価償却費	(87,700)
営業利益	(190,880)
営業外収益	(52,000)
営業外費用	(24,000)
税引前当期純利益	(218,880)
法人税、住民税、及び事業税	(100,000)
当期純利益	(118,880)

精 算 表

勘定科目	本店		支店		修正記入		損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方								
現金	236,800		128,000						364,800	
当座預金	408,000		83,200						491,200	
受取手形	123,000								123,000	
売掛金	213,000		98,000						311,000	
繰越商品	164,000		78,000		274,000	242,000			274,000	
支店	781,200					781,200				
土地	420,600		164,000						584,600	
建物	260,000		284,000						544,000	
車両	220,000		122,000						342,000	
買掛金		217,000		28,000						245,000
借入金		786,000								786,000
貸倒引当金		2,600		1,400			9,020			13,020
建物減価償却累計額		38,000		32,000			27,200			97,200
車両減価償却累計額		48,000		52,000			60,500			160,500
本店				781,200	781,200					
資本金		1,000,000								1,000,000
利益準備金		240,000								240,000
繰越利益剰余金		280,000								280,000
売上	1,460,000		666,000					2,126,000		
支店売上		230,000			230,000					
受取家賃		40,000					12,000	52,000		
仕入	1,064,000		265,000		242,000	274,000	1,297,000			
本店仕入			230,000			230,000				
営業費	419,000		108,400		14,000		541,400			
支払利息	32,000						8,000	24,000		
	4,341,600	4,341,600	1,560,600	1,560,600						
前払費用					8,000				8,000	
未払費用						14,000				14,000
未収収益					12,000				12,000	
減価償却費					87,700		87,700			
貸倒引当金繰入額					9,020		9,020			
法人税等					100,000		100,000			
未払法人税等						100,000				100,000
当期純利益							118,880			118,880
					1,757,920	1,757,920	2,178,000	2,178,000	3,054,600	3,054,600

【本支店合併B/Sの作成】

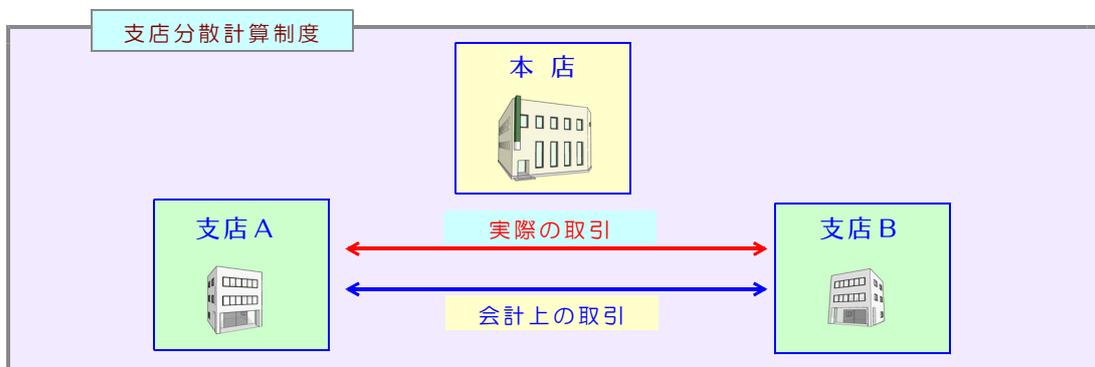


4. 支店が複数あるケース

支店が複数ある場合に、支店間の取引をどのように仕訳するかについては、「支店分散計算制度」と「本店集中計算制度」という2つの方法があります。内容は名称から想像できますが、「本店集中計算制度」は、やや難しく感じるかも知れません。

4-1 支店分散計算制度

支店分散計算制度では、支店間の取引については、支店間だけで仕訳を行います。下図のように、実際の取引と会計上の取引が一致しているため、理解しやすい方法ですが、支店間の取引について、本店の管理が不十分になる可能性があります。



① 支店Bは、支店Aへ300円の現金を送金した。

(支店Aの仕訳)	(本店の仕訳)	(支店Bの仕訳)
現金 300 / 支店B 300	仕訳なし	支店A 300 / 現金 300

② 支店Aは、支店Bの営業費600円を立替払いした。

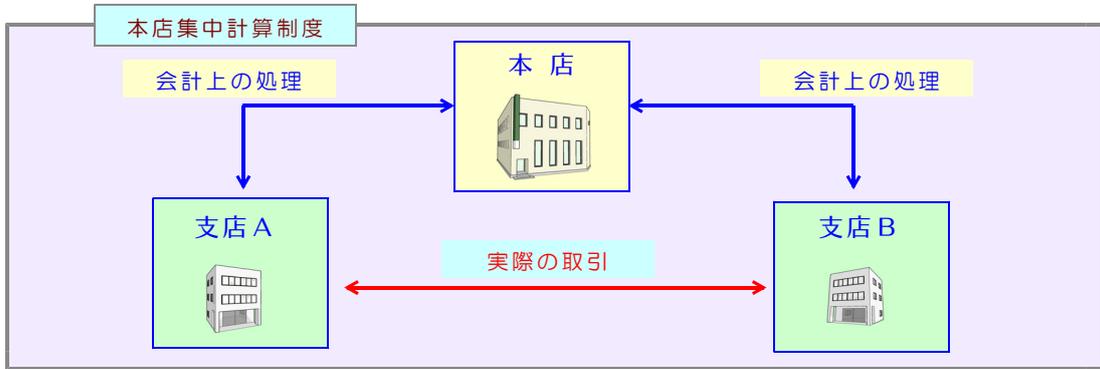
(支店Aの仕訳)	(本店の仕訳)	(支店Bの仕訳)
支店B 600 / 現金 600	仕訳なし	営業費 600 / 支店A 600

③ 支店Aは、支店Bに商品800円を送付した。

(支店Aの仕訳)	(本店の仕訳)	(支店Bの仕訳)
支店B 800 / 支店B売上 800	仕訳なし	支店A仕入 800 / 支店A 800

4-2 本店集中計算制度

本店集中計算制度では、支店間の取引について、いったん本店勘定を介在して仕訳を行います。このためには、支店間で取引を行う場合に、逐一本店に報告する必要があります。また、下図のように、実際の取引と会計上の処理が一致していないため、仕訳にも手間がかかりますが、本店による支店間取引の把握・管理が十分に行えることとなります。



支店間の取引について、常に本店を介在させて取引を行ったと仮定して仕訳を行います。

① 支店Bは、支店Aへ300円の現金を送金した。

→ 支店Bは本店に現金を送金し、その後、本店が支店Aへ現金を送金した。

(支店Aの仕訳)	(本店の仕訳)	(支店Bの仕訳)
現金 300 / 本店 300 本店への債務	支店A 300 / 支店B 300 支店Aへの債権 支店Bへの債務	本店 300 / 現金 300 本店への債権
支店Aは、本店から現金300円を受取った。	本店は支店Bから現金を受け取った。 現金 300 / 支店B 300 本店は支店Aに現金を送金した。 支店A 300 / 現金 300	支店Bは、本店に現金300円を送金した。

② 支店Aは、支店Bの営業費600円を立替払いした。

→ 支店Aは本店に現金を送金し、その後、本店が支店Bの営業費を立替払いした。

(支店Aの仕訳)	(本店の仕訳)	(支店Bの仕訳)
本店 600 / 現金 600 本店への債権	支店B 600 / 支店A 600 支店Bへの債権 支店Aへの債務	営業費 600 / 本店 600 本店への債務
支店Aは、本店に現金600円を送金した。	本店は支店Aから現金を受け取った。 現金 600 / 支店A 600 本店は支店Bのために現金を支払った。 支店B 600 / 現金 600	支店Bは、本店に営業費600円を立替払いしてもらった。

③ 支店Aは、支店Bに商品800円を送付した。

→ 支店Aは本店に商品を販売し、その後、支店Bが本店から商品を仕入れた。

(支店Aの仕訳)	(本店の仕訳)	(支店Bの仕訳)
本店 800 / 本店売上 800 本店への債権	支店B 800 / 支店A 800 支店Bへの債権 支店Aへの債務	本店仕入 800 / 本店 800 本店への債務
支店Aは、本店に商品800円を販売した。	本店は支店Aから商品を仕入れた。 支店A仕入 800 / 支店A 800 本店は支店Bに商品を販売した。 支店B 800 / 支店B売上 800	支店Bは、本店から商品800円を仕入れた。